

【目的】 高齢者の地域居住の増加に伴い、背骨の姿勢と QOL の関係が注目されている。しかし、この関係の詳細はまだ十分に分かっていない。近年の日本人集団コホート疫学運動調査（おぶせスタディ）により、C2-C7 頸椎矢状軸（CSVA）が男性では 60 代から増加し始め、女性では増加しないことが明らかになった。本研究は、頸椎症性変化の病態を明らかにすることを目的としている。

【方法】 協力町の住民基本台帳から無作為抽出で 50 歳から 89 歳の 411 名（男性 202 名、女性 209 名）を抽出した。CSVA、C2-C7 頸椎前弯（CL）、T1 傾斜（T1S）、矢状軸（SVA）を含むいくつかの矢状軸アライメントパラメータの測定のため、すべての参加者に立位での側面 X 線撮影を実施した。また、頸椎症性変化の有無も記録した。頸椎矢状面アライメントと頸椎症との関連、および頸椎矢状面アライメントと全脊柱アライメントとの関連について検討した。

【結果】 頸椎症の有病率は、男性（81%）が女性（70%）より有意に高かった（ $p=0.01$ ）。CL は年齢で調整すると、頸椎症患者において有意に小さかった（ 3.4° 小さい、 $p=0.01$ ）。T1S から CL を引いた値は、男性、女性ともに CSVA と中程度の正の相関を示した（それぞれ $r=0.49$ 、 0.48 、いずれも $p<0.01$ ）。男性のみ、CSVA と CL は年齢とは無関係に SVA と弱い正の相関を示した（それぞれ $r=0.31$ と 0.22 、いずれも $p<0.01$ ）。頸椎のミスアライメントは、男性よりも女性において、SF-8 スコアの低下とより明確に関連していた。地域在住の高齢者において、頸椎症に伴う頸椎矢状面のアライメント変化は、全脊柱のアンバランスを補うための機能低下として現れることが明らかとなった。

頸椎症が頸椎アライメントパラメータに与える影響

